

共形変換群 $O(p, q)$ に関する対称性破れ作用素

小林俊行 (東京大学)
レオンチエフ アレックス (東京大学)

小林氏と Speh 氏の $O(n+1, 1) \downarrow O(n, 1)$ の対称性破れ作用素についての著書 [KS15]¹ を高階の群の組 $(O(p+1, q+1), O(p, q+1))$ に一般化することを目指す。以下は小林俊行氏と共同研究を報告する。標準球面の直積 $S^p \times S^q$ に、第 1 成分は正定値、第 2 成分は負定値となる計量を与え、更に対蹠点を同一視することによって得られる、符号 (p, q) 擬リーマン多様体を

$$X \equiv X^{p,q} \equiv (S^p \times S^q) / \mathbb{Z}_2$$

を表す。 $q = 0$ の場合は $X^{p,0} \simeq S^p$ であり、立体射影の逆写像を一般化することにより、 $X^{p,q}$ は平坦な擬リーマン多様体 $\mathbb{R}^{p,q}$ の共形コンパクト化であることがわかる。 $\mathbb{R}^{(p+1)+(q+1)}$ 上の符号 $(p+1, q+1)$ をもつ標準二次形式を $Q_{p+1,q+1}$ と表し、 $Q_{p+1,q+1}$ を保つ線形変換からなる群を $G = O(p+1, q+1)$ とする。 G は X に共形変換群として作用する。共形変換群の一般理論 (Kobayashi-Orsted, Part I, Adv. Math., 2003) より、複素数 λ をパラメータとする表現の族 $I(\lambda)$ を $C^\infty(X)$ 上に定めることができる。簡約リー群の言葉で言い換えると、 X は G の (一般化された) 旗多様体 G/P と同一視でき、 $I(\lambda)$ は極大放物型部分群 $P = MAN$ から誘導された球退化主系列表現である。 G の簡約部分群として第 p 座標の固定部分群を G' とすると、 G の表現 $I(\lambda)$ と同様に $\nu \in \mathbb{C}$ に対して $G' \simeq O(p, q+1)$ の表現 $J(\nu)$ を $C^\infty(X^{p-1,q})$ 上に定義される。

定義 1. 連続な線形写像 $T : C^\infty(X^{p,q}) \rightarrow C^\infty(X^{p-1,q})$ で $J(\nu)(g) \circ T = T \circ I(\lambda)(g), \forall g \in G'$ を満たすものを対称性破れ作用素 (SBO) という。

問題 1 (KS15). すべての $\lambda, \nu \in \mathbb{C}$ に対して、対称性破れ作用素を構成し、分類せよ。

$q = 0$ の場合には、この問題は [KS15] で完全に解決された。以下では $p, q > 0$ の場合には、この問題が解決したことを報告する。手法は [KS15] で開発された手法を用いるが、 p, q が一般の場合には、構成がやや複雑になる。 $X = X^{p,q} \simeq G/P, Y := X^{p-1,q} \simeq G'/P'$ とおき、その稠密な座標近傍 $\mathbb{R}^{p,q} \supset \mathbb{R}^{p-1,q}$ (表現論の言葉では N -picture) を考える。 C を $\mathbb{R}^{p,q}$ の錐 $Q_{p,q} = 0$ を X 内で閉包をとって定まる閉集合、 o を $\mathbb{R}^{p,q}$ の原点の X における像とする。このとき両側剰余類 $P' \backslash G'/P$ は以下の形で与えられる。

定理 1. $C, Y, C \cap Y, \{o\}$ が両側剰余類 $P' \backslash G'/P$ の閉集合となる。

[KS15] の一般論を用いて、以下の 2 つの写像 Op と \mathcal{S} を定義する :

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}_{G'}(I(\lambda), J(\nu)) & \xrightarrow{\simeq} & (\mathcal{D}'(G/P, \mathcal{L}_{n-\lambda}) \otimes \mathbb{C}_\nu)^{P'} \xrightarrow[\mathcal{S}]{F \mapsto \text{supp}(F)} 2^{P' \backslash G'/P} \\ & \searrow \text{Op} \simeq & \downarrow \text{rest} \simeq \\ & & \text{Sol}(\mathbb{R}^{p,q}; \lambda, \nu) \subset \mathcal{D}'(\mathbb{R}^{p+q}) \end{array}$$

定理 2 (対称性破れ作用素の構成). 次のような対称性破れ作用素が構成される (*well-definedness* も定理の一部である)。

regular SBO: $(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2$ に正則に依存する対称性破れ作用素 $R_{\lambda,\nu}^X : I(\lambda) \rightarrow J(\nu)$ 。

$R_{\lambda,\nu}^X$ はまず、 $\text{Re}(\lambda + \nu) > n$ かつ $\text{Re} \nu < 0$ のとき局所可積分関数 $|x_p|^{\lambda+\nu-n} |Q_{p,q}|^{-\nu}$ の定数倍を核関数とし、 $(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2$ に関する以下のような解析接続として定義される。

$$\text{Op}^{-1}(R_{\lambda,\nu}^X) = N(\lambda, \nu) |x_p|^{\lambda+\nu-n} |Q_{p,q}|^{-\nu}, \quad N^{-1}(\lambda, \nu) := \Gamma\left(\frac{\lambda-\nu}{2}\right) \Gamma\left(\frac{1-\nu}{2}\right) \Gamma\left(\frac{\lambda+\nu-n+1}{2}\right);$$

なお、*generic*な $(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2$ に対しては $\mathcal{S}(R_{\lambda, \nu}^X) = X$ となる。さらに $\{(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2 \mid R_{\lambda, \nu}^X = 0\}$ は \mathbb{C}^2 における可算無限集合であって、具体的に決定できる。

Y に付随する特異積分: $k := \frac{1}{2}(n-1-\lambda-\nu) \in \mathbb{N}$ のとき $\nu \in \mathbb{C}$ に正則に依存する対称性破れ作用素 $R_{\lambda, \nu}^Y \neq 0$ 。核超関数は

$$\text{Op}^{-1}(R_{\lambda, \nu}^Y) = N_Y(\lambda, \nu) \delta^{(2k)}(x_p) \times |Q_{p,q}|^{-\nu}.$$

C に付随する特異積分: $\nu \in -1 - 2\mathbb{N}$ とする。 $\lambda \in \mathbb{C}$ に正則に依存する対称性破れ作用素 $R_{\lambda, \nu}^C \neq 0$ 。核超関数は

$$\text{Op}^{-1}(R_{\lambda, \nu}^C) = N_C(\lambda, \nu) |x_p|^{\lambda+\nu-n+1} \times \delta^{(-1-\nu)}(Q_{p,q}).$$

微分対称性破れ作用素: $k := \frac{1}{2}(\nu - \lambda) \in \mathbb{N}$ のとき $\lambda \in \mathbb{C}$ に正則に依存する対称性破れ作用素 $R_{\lambda, \nu}^{\{0\}} \neq 0$ 。

$$R_{\lambda, \nu}^{\{0\}} = \tilde{C}_{\nu-\lambda}^{\lambda-\frac{n-1}{2}} \left(-\Delta_{\mathbb{R}^{p-1,q}}, \frac{\partial}{\partial x_p} \right)$$

ここで $\tilde{C}(s, t)$ は [KS15, (16.3)]¹ で与えられた二変数多項式。

$S = Y, C$ に対して、 $N_S(\lambda, \nu)$ は Γ 関数で表示される。 *generic* には $\mathcal{S}(R_{\lambda, \nu}^S) = S$ 。

定理 3 (対称性破れ作用素の分類). $p > 1$ に対して

$$\text{Hom}_{G'}(I(\lambda), J(\nu)) = \begin{cases} \mathbb{C}R_{\lambda, \nu}^X \oplus \mathbb{C}R_{\lambda, \nu}^{\{0\}}, & (\lambda, \nu) \in // \cap ||| \\ \mathbb{C}R_{\lambda, \nu}^X, & \text{otherwise.} \end{cases}$$

系 1. $\dim \text{Hom}_{G'}(I(\lambda), J(\nu)) \in \{1, 2\}$ ($\forall \lambda, \forall \nu \in \mathbb{C}$). 等号成立 $\iff (\lambda, \nu) \in // \cap |||$ 。

ここで、 $// := \{(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2 \mid \lambda - \nu = -2k \in -2\mathbb{N}\}$ 、 $||| := \{(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2 \mid \nu \in -2\mathbb{N} \cup (q+1+2\mathbb{Z})\}$ 。

定理 4 (K 不変ベクトルにおける“固有値”). 正規化された K 不変ベクトル $\mathbb{1}_\lambda \in I(\lambda)$ と K' 不変ベクトル $\mathbb{1}_\nu \in I(\nu)$ に対して

$$R_{\lambda, \nu}^X \mathbb{1}_\lambda = 2^{1-\lambda} \frac{\pi^{n/2}}{\Gamma(\frac{\lambda}{2}) \Gamma(-\frac{q}{2} + \frac{\lambda+1}{2}) \Gamma(\frac{q-\nu+1}{2})} \mathbb{1}_\nu \quad \text{が成り立つ。}$$

定理 5 (留数定理). (λ, ν) が特殊値のとき $R_{\lambda, \nu}^X$ は $R_{\lambda, \nu}^Y, R_{\lambda, \nu}^C, R_{\lambda, \nu}^{\{0\}}$ の定数倍となる。定数倍の係数はすべて明示的に決定される。

定理 6 (factorization identities). $\tilde{\mathbb{T}}_\lambda : I(\lambda) \rightarrow I(n-\lambda)$ を *Knapp-Stein* 作用素とする。 $(\lambda, \nu) \in \mathbb{C}^2$ に対して $\tilde{\mathbb{T}}_{n-1-\nu} \circ R_{\lambda, n-1-\nu}^X = q_X^{TX}(\lambda, \nu) R_{\lambda, \nu}^X$ と $R_{n-\lambda, \nu}^X \circ \tilde{\mathbb{T}}_\lambda = q_X^{XT}(\lambda, \nu) R_{\lambda, \nu}^X$ となる。定数 $q_X^{TX}(\lambda, \nu), q_X^{XT}(\lambda, \nu)$ 明示式が決定される。

さらに、 $I(\lambda)$ や $J(\nu)$ の subquotient として現れる Zuckerman の導来関手加群 $A_q(\lambda)$ に関する対称性破れ作用素の存在条件が得られるが、これは別の機会に述べたい。

¹ T. Kobayashi and B. Speh. Symmetry breaking for representations of rank one orthogonal groups. *Memoirs of the American Mathematical Society*, vol. **238**, 2015.